慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岡田純一著 フランス経済学史研究
Sub Title	J. Okada, Essai sur l'histoire de la penèe économique en France
Author	中宮, 光隆
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.2 (1983. 6) ,p.368(182)- 371(185)
JaLC DOI	10.14991/001.19830601-0182
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830601-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岡田純一著

『フランス経済学史研究』

（御茶の水書房，1982年刊）

本書の著者は，経済学史と経済理論研究の重鎮のひとりで，従来からこの分野で貴重な業績を積み重ねてこられた。最近のわが国における経済学史研究が，ややもすると経済学説史と思想史への両極分解の傾向を強め，あるいは思想史研究へとより重心が移動しつつある情況のなかで，著者は，そのいずれにも偏することなく，ひとつの対象を多面的に幅広く扱ってこられた。しかもその取り上げられる対象は，アダム・スミスやマルクスは言うに及ばず，重商主義から近代経済学におよんでいる。すなわち著者の研究は，一方では時間的・空間的に壮大な広がりをもち，他方では個々の対象について深遠かつ多面的になされてきたのである。広い視野と深い分析——これが著者の経済学史研究の特徴だと言えよう。このことは，以前からすでに氏の著作に表われていた。1964年に刊行（1967年に増補版が発刊）された著者の前著『経済学における人間像』で扱われている対象は，スミス，マルクス，シスモンディであり，そこで考察された論点は，経済学説史と思想史の双方を含む広範なものであった。しかもそこでは，たんに対象と論点のスケールが大きいだけではなく，その書名の示す通り「経済学における人間」の問題というひとつの統一的な視点からそれらが考察されていた。すなわち，「今日われわれをとりまく世界は，いずれにせよ，一つの重大な転換の時期に直面している」（『経済学における人間像』，18頁）と考える氏は，「一部分に『豊かな社会』を現出させ」（同）ながら「しかしなお物質的窮乏と，非人間的隷属から，人類の大多数は解放されていない」（同）との現状認識に基づき，「こと経済学にかんしていえば，人々は現時点において，人間の問題を経済学はいかに考えるかをあらためて問うているのではないか」（同）と述べ，このような問題意識に基づいて前記の如き対象を設定し，論点を展開されたのであった。

著者のこのような問題意識や研究姿勢は，その後も一貫して継続している。それを端的に示すのが本書である。しかしながら，そのことは，本書が前著の枠を越えていないとか焼き直しであるということを示しているのではない。著者が「経済学をはじめて学ぶようになった時以来」（同，257頁）抱きつづけてきた「『経済学では一体人間はどのようなものとしてとらえられているのだろうか』という素朴な質問」（同）にたいして，前著が「その研究途上の経済学史研究の側面における中間報告にすぎないもの」（同）（評者はそのようには考えず，これは著者の謙遜だと思うが）だったとすれば，本書は，著者が抱きつづけてきた問題にたいする著者自身のひとつの解答とみなすことができるだろう。ちなみに後述の如く本書の序章は，フランス経済学の包括的展望が4つの視点から整理されているが，そのひとつに「人間主体の問題の探究」があげられている。ここで著者は，「フランス経済学においては，自然と人間との間の関係において経済をとらえ，経済諸現象の背後に潜む人間主体の問題を見逃がさないといった傾向の存在が浮かびあがってくる」（『フランス経済学史研究』，35頁）と述べる。著者が一貫して持ちつづけてきた“経済学における人間の問題”がフランス経済学史をみるうえにおいても貫かれていることを，本書は明瞭に示しているといえるだろう。しかも本書で著者は，後述の如くボアギュベールからレオン・ワルラスにいたる200年余の長期にわたるフランス経済学を考察の対象としているのである。「経済学史の研究においては，学史上有力な，影響力の大きな経済学者の学説・理論を徹底的に研究していくことが絶対に重要であること」（同，1頁）を十分認めたうえで，それでもなお著者は，「学説や理論の系譜に即して追求して行くことも，それに劣らず肝要なこと」（同）と考えて本書を構成している。このことじたい，まことに正当であるばかりでなく，著者自身も述べているように（同，1頁），フランス経済学を学史的にたどった研究書が内外にきわめて乏しい情況のもとで，本書は貴重な労作のひとつに数えあげられてしかるべきであろう。

本書の構成は，以下の如くである。

序　章　経済学形成史におけるフランスの役割とフランス経済学の特質

第一章　フランソワ・ケネーの経済学

第二章　ケネー『経済表（原表）』は未完成か

第三章　J.-B. セイにおけるアダム・スミス経済学の批判的継承

第四章　J.-B. セイ経済学の理論的特質

附論　インダストリーとは何か——スミスとセイにおいて——

第五章　シモンド・ド・シスモンディ経済学の特

質とその転回

第六章　シスモンディ経済学における古典派経済学批判

第七章　レオン・ワルラスの純粋経済理論

第八章　レオン・ワルラス経済学体系論——そのビジョン・理論・政策——

第九章　レオン・ワルラス『純粋経済学要論』の形成——『要論』発刊の頃のワルラスのいくつかの書簡をめぐって——

補論Ⅰ　近代経済学とスミス——最近の理論史的研究——

補論Ⅱ　『国富論』における分業と価格機構

このうち序章と第五および六章は書き下し（ただしその一部分は前著から採られている）であり，その他は1967年から79年に論文（第四章附論は公開講座での講演記録）として発表されたものである。

ボアギュベールからレオン・ワルラスにいたるフランス経済学の概括的整理がなされている序章は，第一章以降の導入であるとともにいわば総括でもある。ここでは「フランス経済学の系譜を一貫する特徴」（同，14頁）が，(1)再生産＝経済循環の把握，(2)企業者概念の析出，(3)資源配分論の視点，(4)人間主体の問題の探究の4点にまとめられ，論究されている。

第1に再生産＝経済循環の把握の問題として著者は，まず「ボアギュベールやカンティロンにおいても，『経済循環』は，ある程度まで把握されていた」（同，15頁）と指摘する。しかしながら，とくに後者にはケネー『経済表』の先駆的構想があるとはいえ，両者とも「経済循環」は「明確に再生産と結合して」（同，16頁）把握されてはいなかったのであって，「社会的富の再生産と『経済循環』のメカニズムとを最初に結合したのは，いうまでもなくケネーの『経済表』である」（同，17頁）との通説を踏まえて，著者は，第一・二章でケネー『経済表』を詳細に考察する。そこではとくに，第二章において「ケネー『経済表原表』は決して未完成形態の経済表ではない」のであって，むしろ「『原表』こそ「経済表」の完成形態であって，その他の表，とりわけ，「範式」は，経済表の含意をより理解し易い形式で，しかもその一面をうきぼりにして分析解説したものにほかならない」（同，101頁）との主張が注目される。この論証はかなり複雑かつ緻密であって紙幅が限られている本評で再現することは不可能であるが，無理を承知のうえで敢えて一言でいうならば，着目点は「当初の生産的階級の欄に書かれた300リーブルは，『二重（ダブル）の300リーブル』と考える」（同，91頁）ところにある。そうすることによって，従来『原表』を未完成であるとみなす根拠になった，表下の注記にはみられ表中には明示されていないと考えられた生産階級の「原前払いの利子」300リーブルが，表中にも明白に（「二重（ダブル）の300リーブル」として）示されていることになる——これが著者の主張である。この点は，異論をはさむ余地のない説得力ある論述であると評者には思われる。

序章で論究されているフランス経済学の特徴の第1点「再生産＝経済循環の把握の問題」におけるもうひとつのポイントは，シスモンディにある。もっとも序章では，彼の「期間分析（period analysis）」など「再生産論に関する2，3の点を指摘」（同，18頁）し，また結論的に「シスモンディの再生産論は，フランス経済学の伝統的な思考を継承しつつ独自な理論を構成している」（同，19頁）と述べるにとどまり，詳論は第五，六章に委ねている。第六章ではシスモンディの古典派批判がリカードゥやセイにたいする反論から出発しているとして，この点に関するシスモンディの見解が解説され，さらに彼の再生産論と恐慌論が考察されている。ここでの特徴は，従来ほとんど扱われなかったシスモンディの晩年の著書である『経済学研究』（1837～38年）が分析の対象となっていることである。この点だけをとってみても，本書のシスモンディ研究が（前著とともに）画期的であることが判る。評者の私見によれば，『経済学研究』を考察する意義は，たんにそれが現在までほとんど扱われてこなかったからという消極的な点にあるのではなく，『研究』において展開されている論述が『新原理』のそれを一層明瞭にすると同時に，さらに後者ではみられなかった新たな論理が前者に存在するという意味においても，あるのである。とくに価値論は『研究』にいたって初めて展開されるし，恐慌と信用および諸資本の競争の問題もそこではより深く立ち入った議論がなされている。すなわち『研究』の検討なしにはシスモンディ経済学の全体像はおろか，その部分的な論点さえも歪曲されかねないといっても過言ではないと思われる。さらにいえば，評者は，『新原理』第2編で展開されている再生産の円環（および螺線）運動の論述がシスモンディの恐慌論そのものであるとする通説に疑問を抱いている。その箇所は，むしろ均衡論的再生産論であり，せいぜい

不均衡を言うための理論的基準ないしモデルであって，再生産を不均衡に導く論理は，第4編で諸資本の競争との関連において展開されているのではないかと思われる。『研究』における恐慌論が，本書の著者の紹介からも明らかなように（253～54頁），諸資本の競争の視角に重点を移行させていることも，この点を傍証しているとはいえないだろうか。もちろん本書の著者は，前著においても本書でもそのような視点で『研究』を検討の対象にしているのではない。しかし少なくともシスモンディ研究の際に『研究』の考察が不可欠であることは否定の余地がないだろう。その意味で本書は，今後のシスモンディ研究の先駆的役割を担っているといえる。

本書の序章で論述されているフランス経済学の系譜における特徴の第2点は，企業者概念の析出の問題である。この点に関しても，序章ではカンティロンからケネー，テュルゴー，さらにセイやレオン・ワルラスにいたる変遷が概括的に述べられるにとどまり，セイとワルラスに関する詳細は，後の諸章で展開されている。このうち第三章で著者は，セイにおける企業者概念の問題を，彼の“industrie”論との関連で検討している。もっともこの章全体のテーマは，スミスとセイの継承関係を追うことにあって，そこでは企業者概念の問題だけではなく生産的労働と不生産的労働の区別の問題も含めて，“industrie”論を軸にしたセイによるアダム・スミス批判が論じられている。スミスとセイの継承関係に関しては，後者は前者の祖述者と規定されたり（たとえば吉田静一「ジャン・バティスト・セイ」，遊部他編『講座経済学史』II 1976所収，参照），あるいは後者が前者から受け継いだ内容をリカードゥとの比較において論じられたり（羽鳥卓也『古典派資本蓄積論の研究』，1963，参照）したが，セイにおける industrie 論の意義という点からセイのスミス批判を考察したのは本書の独創的な点であって，この点は注目されるべきである。

この他にも，たとえばセイの価値論を単純に「効用価値論」と規定することはできず，前記フランス経済学の系譜における特徴の第3点目とも関連するが，それを社会の必要にみあった資源配分論という観点から重要視すべきだと指摘され，あるいは「一般均衡論」の創始者レオン・ワルラスは，シュンペーターが主張するように「純粋理論に関する限りでは，ワルラスが私の意見ではあらゆる経済学者のなかで最も偉大なもの」（Schumpeter, *History of economic analysis*, 7th, printed, 1968, p. 827, 東畑訳『経済分析の歴史』5, 1958年，1,740頁）なのではなく，「同時に，かれ自身が自己の純粋経済学を経済学体系の一部分であると考え，応用経済学ならびに社会経済学を包含した一つの包括的な経済学体系を構想し」（本書，266頁）ていたのであって，そのような位置づけのうえでワルラス経済学体系を究明すべきだと主張されるなど，本書においては注目すべき論点を多く含んでいるが，ここではこれ以上に立ち入る余裕はない。

以上瞥見したかぎりにおいても明らかなように，本書は，そこで扱われた対象の広範さにおいてもまた分析された内容の深遠さにおいても，フランス経済学史研究者の第一人者のひとりである著者ならではの研究成果をまとめた好著である。この点は，まず第1に強調されなければならないだろう。それにもかかわらずなお今後のわれわれの研究課題を敢えて列挙するならば，以下の点が考えられる。第1は，フランス経済学史の対象における個別研究の深化の問題である。たとえばシスモンディに関しては前述の如く，その恐慌論においてさえ再検討の余地があると評者は考える。また著者自身が別の箇所で述べているように，「Schumpeter によって Smith から L. Walras への一般均衡論の系譜の重要な媒介点とされたところの Say 法則の均衡論的な性格については，十分に論述されつくしてはいない」（太田一廣・岡田純一「フランス経済学史」〔『経済学史学会年報』第20号，1982年，所収〕の中の岡田氏稿「II 19世紀におけるフランス経済学」，29頁）のである。第2の課題は，第1の課題とは逆にフランス経済学の系譜の問題である。ここでは第1に，この点も著者自身が述べているように，「Say から L. Walras への道程には究明されるべきいくつかの課題が残されているように思われる」（同，34頁）のである。第2にフランス経済学史の系譜におけるサン・シモンやサン・シモニアン，あるいはプルードンの位置づけの問題である。これらはいずれも古典経済学に入れることはできないとしても，個別的な論点，とくに貨幣論・信用論や産業化の問題，さらには「経済学における人間の問題」に関して，フランス経済学の中で果した役割には無視できないものがあると思われる。第3の課題は，これらフランス経済学とマルクスとの関係である。たとえば第1に，著者が本書第一章で論述されているように，ケネーが「富をたんに使用対象として，

使用価値の側面からではなく，使用価値とは直接関連のない価値の側面からとらえ」（本書，56頁）ていたとすれば，ケネーは使用価値で再生産をみていたとするマルクスの指摘（『剰余価値学説史』Marx-Engels-Werke, Bd. 26 I, SS. 14～17〔邦訳，15頁〕，S. 22〔邦訳，21～22頁〕参照）との関係をいかに捉えるかの問題（経済学史研究の成果が『剰余価値学説』の規定と齟齬をきたすことが問題なのではないが）が生じてくるだろう。また第2に，評者は，従来の通説以上にフランス経済学とマルクスの関係を肯定的にも否定的にも密接に捉えているが，この点に関しても今後の課題であると考える。

これらの諸点はともかく，本書がこれとわずか10カ月の間にあい前後して刊行された吉田静一氏の遺著『フランス古典経済学研究』とともに，現在のわが国におけるこの分野の研究水準を代表するものであるといえるだろう。

中　宮　光　隆
（熊本女子大学助教授）